

水曜通信32

東北学院宗教センター編

2023年
11月

第67回 水曜公開礼拝

2023年11月15日(水) 18:30-19:00



<礼拝次第>

前 奏：H.シャイデマン作曲

「天にましますわれらの父よ」1,2節

讃美歌：122番「みどりもふかき」

聖 書：マタイによる福音書 18章10-14節

讃美歌：390番「やさしくともをむかえよ」

説 教：「迷わずにいた99匹の羊」

頌 栄：541番「ちちみこみたまの」

後 奏：M.レーガー 作曲

「強き王なる主をほめまつれ」



説教

東北学院中学校・高等学校
宗教主任 松井 浩樹



演奏・第2部演奏

礼拝オルガニスト
小野 なおみ

後奏の後、小野 なおみ氏（礼拝オルガニスト）のオルガン演奏による賛美を行います。
また、オルガンとマリンバによる讃美歌の献曲も予定しています。

次回第68回水曜公開礼拝は2023年12月20日です。

第66回 水曜公開礼拝報告（説教：大西 晴樹、奏楽：渡辺 真理）

2023年10月18日（水） 18：30－19：00

讚美歌：讚美歌21 226番「輝く日を仰ぐとき」
聖書：創世記 1章6-7節
讚美歌：讚美歌21 482番「わが主イエスいとるわし」
説教：「海と空のあいだに」
頌栄：讚美歌21 27番「父・子・聖霊の」



【説教要旨】

創世記第1章6節の「水の中に大空があり、水と水を分けるようになれ」という言葉は、気球温暖化により高温と洪水に苦しむわれわれにとって示唆を与える言葉である。石牟礼道子『苦海浄土：わが水俣病』の原題が「海と空のあいだに」であり、足尾鉍毒事件と向き合った田中正造は水と空気を神の賜物と直感するところにキリスト教信仰の根拠があるとさえ述べている。本説教では、天地創造の意味を改めて問い直し、われわれが直面している問題に迫ってみたい。

（院長・学長・宗教センター所長 大西 晴樹）

前奏：J.G.ヴァルター作曲 「主よ、御言葉をもて我らを守りたまえ」
後奏：M.ヴェックマン作曲 「さあ喜べ、親愛なるクリスチャン達よ」

どちらの曲も原曲はマルティン・ルターの作詞作曲で、「主よ、御言葉をもて我らを守りたまえ」（1541年）は教皇とトルコの非道に対して歌われる童謡という付け加えをされて出版されました。「さあ喜べ、親愛なるクリスチャン達よ」（1523年）は宗教改革により殉教した二人の修道士に触発されて書いた、彼の最も重要な詩の一つとして考えられています。編曲のヴァルターはドイツバロック後期の作曲家、ヴェックマンはハンブルクで活躍したバロック初期の音楽家です。（礼拝オルガニスト 渡辺 真理）



礼拝とその後の19時00分から30分までの渡辺 真理氏によるオルガンによる賛美に39名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：渡辺 真理）

1. 讚美歌21-246 「天のかなたから」
J.バツヘルベル作曲「高き御空より我は来れり」
2. 讚美歌21-160 「深き悩みより」
J.S.バッハ作曲「深き悩みの淵より、われ汝に呼ばわる」BWV686
3. 讚美歌21-377 「神は我が砦」
J.N.ハンフ作曲「神はわがやぐら」
4. W.ルドニック作曲「ルターの〈神はわがやぐら〉による幻想曲」

10月31日は宗教改革記念日です。1517年、マルティン・ルターはローマカトリック教会への抗議としてヴィッテンベルクの城壁に95ヶ条の論題を打ち付け、聖書主義を主張しプロテスタントを成立させます。

ルターが聖書のドイツ語訳を行ったヴァルトブルク城のあるアイゼナッハは小さな街ですが、J.S.バッハの生誕地でもあり、2017年に宗教改革500年祭で訪れた際には、喜びとバッハのコラールで街中が賑わっていました。

ルターは多くの賛美歌を作詞作曲し、今も世界中で歌われています。本日は讚美歌21に取められている中から3曲を選んで、色々な音楽家の編曲作品を演奏したいと思います。讚美歌21を開き歌詞を味わいながらお聴きいただけたら幸いです。

バツヘルベルは南ドイツオルガン学派の最盛期を支えたオルガニスト、作曲家です。J.N.ハンフはバッハより少し前の北ドイツのオルガニスト、作曲家です。終曲は、19世紀後半に活躍したドイツの教会音楽家、W.ルドニックによる編曲で、宗教改革の戦いの賛美歌にふさわしい壮大な曲です。（渡辺 真理）



ルター宗教改革500年祭
アイゼナッハのルター像
渡辺 真理撮影

宣教師たちの生涯と思想 (8) H(ハーマン)・H(ヘンリー)・クック先生の生涯

クック先生の同労者の一人であった門馬清治郎牧師は、クック先生の人柄を次のように偲んでいます。少し長文になりますが引用いたします。

「彼〔クック〕の神学は単純、信仰は一本調子であった。彼はそれをドイツ青年らしい、火のような、熱情と、鉄のような意志とを以て行った。・・・今や時代は変わって、彼のような一本調子の信仰と、ドン・キホーテ式の方法で伝道できない場合となり、宣教師や、牧師の方々も縁の下の方力持ちのようにはえない伝道に苦勞せねばならぬところの時代となったけれど、その心の底には、やはり彼のような単純簡明、それでなほ火の如くもゆる信仰が益々必要を感じられるのではあるまいか。」(門馬清治郎「生一本の伝道者一故、クック師の思い出」、「神と人」第90号、1929年5月発行)

上記の引用にも表れているように、クック先生は理論よりも、行動において際立つ人でした。抽象的な議論よりも、実践を好む人でした。むしろクック先生の場合には、ドン・キホーテに比されるような行動の中にその思想が体現されていると言えます。短い生涯ではありましたが、多くの人に感化を与えた宣教師でした。(大学宗教主任 藤野 雄大)



クック先生の墓、1916年4月7日没、37歳6ヶ月17日の生涯と記載がある。(仙台市北山キリスト教墓地、藤野撮影)

— 建築が語る東北学院の歴史 (23) —

蔵の町並みとラーメンで有名な福島県喜多方市に、羽生義三郎が設計した3つ目の教会が現存しています。田付川に面したのどかな環境の中に佇む、日本基督教団喜多方教会です。

喜多方におけるキリスト教の伝道は、明治19年(1886)、新島襄によって開かれました。明治23年には日本組合基督教会の講義所が設置され、同29年にはブラッドショウ、30年にはデフォレストが訪れて説教を催した記録も残されています。のち明治40年に日本基督教会東北中会の管轄下に入り、昭和6年(1931)には、中会の独立自給計画に伴う独立教会の1つに選定されました。

現在の会堂が建築されたのは、昭和6年、深瀬忠蔵牧師(東北学院出身)の時代でした。最初は地元の大工・梨本耕一が設計したようですが、建築委員の顧問であった羽生(当時は猪苗代町の伝道所で教師を務めていました)がこれを改め、一閑教会の設計をアレンジして再設計したと伝わります。施工は大工の梨本が行い、同年9月に上棟、翌7年に献堂式が執り行われました。(続)

(工学部 崎山 俊雄)



喜多方教会外観



喜多方教会講堂内観

「宗教改革記念日（10月31日）によせて（2）」 カルヴァンのジュネーヴにおける宗教改革

16世紀初頭の、ヨーロッパにおける宗教改革については、昨年の本誌、第21号において簡単に解説しましたので、今回は、ルターよりも約25年遅く登場したジャン・カルヴァン（1509-1564）の宗教改革についてご紹介します。

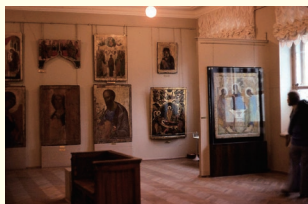
カルヴァンの活動の舞台は、ドイツとフランスの境に接するスイスであり、フランス語圏ジュネーヴです。この町は1535年に独立を宣言すると、その際に宗教改革（福音主義）を導入し、当時のカトリック教会の群れと袂を分かたずジュネーヴ共和国（Civitas Geneve）を設立しました。

カルヴァンは、宗教改革の第一原理である「聖書のみ」を重んじて旧習を廃し、「キリスト教教理」を明確にし、「教会行政」を整えて、ジュネーヴを福音主義に立脚する国家として尽力しました。この方針は、各国にも伝播し、スイスはもとより、フランス、オランダ、ドイツの一部、スコットランドなどに新しい教会の群れを生み出すことになりました。東北学院は、カルヴァンの流れを汲むドイツ系アメリカ人たちによってその礎を築いたのです。今でもジュネーヴのスローガンは「闇の後に光(post tenebras lux)」です。（宗教センターチャプレン 野村 信）



【カルヴァン肖像】
ハンス・ホルバイン画

美術による賛美（23） 見えない展示、見せない展示



イコンの展示 ソヴィエト時代
モスクワ トレチャコフ美術館
1976/9/22撮影



若林奮「クロバエの羽」1970年
吹田市 万博記念公園
2015/6/6撮影



東島毅「光のすきま」
2015年 倉敷市 有隣荘
2015/5撮影

美術作品は「もの」です。創世記によると、人間には神の息（spirit : 霊）が吹き込まれましたが、動物や植物を含む他の被造物には吹き込まれず、単なる「もの」です。そして見えます。4/5世紀の聖シメオン伝には、「見ることは所有すること」と書かれています。現代フランスの哲学者ロラン・バルト（1915-80）は「見ることは対象をくもの」と書いています。アメリカの哲学者スーザン・ソントグ（1933-2004）も、「見ることは、対象を展示物に変える」と書いています。「もの」は見えるし、展示可能なのです。だから博物館はもとより、動物園、植物園は可能ですが、「人間」園は許されません。人間は被造物で「もの」ですが、霊でもあるので、意識ある人間を見ることは失礼であるし、展示不可です。

「もの」に霊（意識）を認めれば、それは偶像（アイドル）となります。そうすると、見ることは許されません。展示してはいけません。これは美術の否定です。前回のコラムで示したように秘仏としての仏像がそれです。現代美術でも、若林奮（1936-2003）は、そういう自然な感受性を持って作品を制作しました。お守りのように中を見ることが許されないような作品を作り、また作品を地中に埋めてしまいます。また東島毅（1960年生まれ）は、作品を狭い空間に展示して、外から鑑賞するようにしますが、作品全体はやはり見えません。これが偶像すなわちアイドル、キリスト教の美術（イコン）観念の否定です。（史資料センター客員研究員 鐸木 道剛）



東北学院宗教センター編「水曜通信」
第32号

2023年11月1日発行

〒984-8588 仙台市若林区清水路3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-354-8310

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp